

伝説をさぐるには電車に限る

—総合的な身体感覚としての伝説—

野村典彦

伝説から身体の動きを引き剥しにくいのは、「歴史散歩」とか「伝説めぐり」とかいう言葉の落ち着きの良さが証明している。これら詳細は紙幅の都合で別稿とした。¹また、鉄道の開業に刺激された伝説集を例に、伝説の身体性を本誌に論じたこともある。²本稿では、鉄道旅行と想像力をともにしつつ、紙の手ざわりに馴染んでゆく、身体感覚を総合的に働かせる伝説の動態を扱う。



『近鉄で行く歴史街道』(平11／近畿日本鉄道株式会社業務局)のカバーに、「奈良大和路へは、近鉄特急が便利です」というコピーとともに近鉄の路線図が掲載されている。ほぼ同じ趣向で、昭和9年に傳説物語刊行會が発行した松本壯吉『傳説の河内』の巻末の広告に、「傳説を探ぐるには南海電車に限る」「傳説を探ぐるには大軌電車に限る」「傳説を探ぐるには大鐵電車が第一」という見出しのもと、それぞれの路線図が掲げられている。大軌・大鐵は現在の近鉄へと成長してゆく会社。伝説と鉄道とは既に

昭和初期（斎藤純が指摘する伝説集発行の一つのヤマ）から共鳴している。だから、京成電鉄のP.R誌『京成らいん』vol.547(平14／編集・発行 京成電鉄(株)総務部広報担当)が、沿線を散策させる記事の核として取り上げた千葉県市川市の「真間の手兒奈」伝説が、やはり昭和の初期の旅の書物に紹介されていても当然である。ただし、伝説を訪ねることは趣味として旅の目的たり得るのだと、その書名が宣言している点は忘れずにおきたい。

【藤澤衛彦『趣味の旅 伝説をたづねて』昭2／博文館 より
「真間の手兒奈」の冒頭部分】

本所押上から、東京市内電車と連接して、千葉縣中山町の方へ走る京成電車の軌道は、房總線の鐵路と、其間二三十間を隔てて、ほど並行してゐる。其電車で行けば、川を渡つて市川の町に入り、汽車で行けば、市川の停車場から逆戻りして町の北隅を辿り、こゝから國府臺に行く路がついてゐる。

その江戸川の流、葛飾の野、共に俯視すべき國府臺の崖下、沼の東南、繼橋よりは百歩ばかり東の方の、一小丘上に古樹を存し、樹下に石祀を安置して、手兒奈の墓と稱へてゐる。

真間の手兒奈は、「鶲が鳴く、吾妻の國に、古に、有りける事と、今までに、絶えず言ひ來ると云々」と、「萬葉集」に記録された勝鹿の真間の娘子で、「以下略・野村」次は「不知八幡森」、さらに中山法華經寺の「泣銀杏」と線

路沿いに進んでゆく。本文の前に現況の詳細な説明を置き、現地への交通も案内する。「趣味の旅」は、鉄道の利用を前提としなければ現実的でない。この書の「序」のむすび部分を引用する。

【藤澤衛彦「趣味の旅 伝説をたづねて』より】

本書は、むしろ、傳説そのものの、物語としての興味と魅惑とのうちに、読者の感興も湧さしめ、憧憬の心を繋がしむれば、ほぼその目的は足りりとするもので、更に、この物語によつて、忘れがたい印象を痕づける何物かがあつて、傳説愛好者的心を擊ち、旅情を唆つたとすれば、それはたゞに本書の喜びとするところのみならず、鐵道省の喜びとするところであらう。

鉄道省は『日本案内記』を編纂、昭和4年に刊行を開始した。鉄道路線に沿つて各地の名所旧跡を八分冊で解説する。昭和9年初版の『中國・四國篇』を例にすると、九版（昭10）の発行は博文館。博文館とともに発売元になつてゐる日本旅行協会とは後の日本交通公社である。手軽に旅行に持ち出せる書物が少なからず出版されたこの時期、博文館はそれを支えた出版社の一つだつた。

この『日本案内記』を手に、旅行をしていた人物がある。

【和歌森太郎「途中下車の有難さ」（『和歌森太郎著作集 第14巻』／昭57／弘文堂）より】

和歌森は大正4年の生まれ、『和歌森太郎著作集 別巻』（昭58／弘文堂）の年譜には「一九三三（昭和八年）一七一（八歳）の項に「この年より以後頻りに地方旅行に出る」とある。



『京成らいん』vol.547 (平成14年10月号)
京成電鉄(株)総務部広報担当 編集・発行

◇

だが、和歌森のような読者がすべてと考へるわけにはいかない。

博文館の、今ふうに言えど、「趣味の旅」シリーズ⁴のうち、近藤鉢
ン坊『趣味の旅 川柳をたづねて』（昭3）も、各項目ごとに交

通の便を、例えば「市川鴻の臺」兩國驛より市川驛下車。賃二十
銭。押上より京成電車の便あり」と記しながら名所を回る。「流

石の黄門様さへ入つて見て道を失ひ容易に出て來られなかつた」「八幡敷知らず」では「八幡よりもつと怖いは醫者の斂」と詠む。本音で切り込む川柳の真実味は、この書の「序」にも現れている。

【近藤鉢ン坊『趣味の旅 川柳をたづねて』昭3／博文館より】
興味兼備の旅行案内一本著目的の一つである。行く先の下へ下車驛、鐵道賃金、又みやげ、名物を附記したのはそれが爲。

読んだ丈で旅行氣分になれる旅の乗一本著目的の二である。肩の凝らない読み本ていに書いてみたのもそれ。

明治期以来の案内記については、また、旅する車内の「腰かける」という身ぶりが書齋で書物を読む身ぶりとの往復を可能にすることについては、拙稿「書窓車窓—旅行・通勤の『声』」⁵を参照されたい。伝説を「たどる」「めぐる」といつた総合的な感覚が、文字として伝説を受け入れる際にも刺激され、想像力をして「たどる」「めぐる」ことを可能にしてゆくのである。
もちろん、読者を本気で歩かせようとする書物もないわけではない。例えば、町内歴史散策の案内書として平成元年度ふるさと

創生事業の一環として作成された『沼南の歴史をあるく』（平2／

沼南町教育委員会）はコースの所要時間やトイレの場所も示している。だが、武田静澄『日本伝説の旅』（上）（昭37／社会思想研究会出版部／現代教養文庫）の千葉県の章、冒頭記事「真間の手児奈」に続き、「伝説散歩コース」は「里見の夜泣石」八幡のやぶらざり笠森寺の観音と宗五郎の靈堂（以下略・野村）。バスツアーやこの移動は無理だろう。鷹書房の「史跡をたずねて各駅停車」シリーズでは、岡崎恵男『総武線歴史散歩』（昭63）は駅間が広いので手児奈靈堂周辺を「市川駅」の項で無理なく紹介するが、岩井寛『京成線歴史散歩』（昭62）の場合、靈堂周辺を「市川真間駅」の項で取り上げ、「国府台駅」の項には別の記事を用意する。つまり、「各駅停車」というシリーズ名の拘束により、次の駅まで歩くという現実的なコース設定を認められていない。実際に歩くことよりも読み物としての整合性が明らかに優先されている。そうしてみると、先程の『京成らいん』誌「京成線を歩こう」Vol.7に紹介された「国府台（京成八幡）約45km」を実際に歩く人が何人いたかという疑問も生じてくる。ただし、読者に歓迎される記事だったのは間違いないだろう。数カ月後、千葉銀行のPR冊子『lounge』No.17（平15／千葉銀行広報部も「ちばカルチャートリップ」項に「文化の薰り漂うまち、市川をゆっくりと歩く」という見出しで手児奈靈堂周辺の散策記事を掲載している。

「読んだ丈で旅行氣分」を考えるために、松本清張の『点と線』

(昭33／光文社・昭46／新潮社／新潮文庫)が参考になろうか。

昭和32年の列車・航空機ダイヤによりアリバイが工作されるこの小説は、日本交通公社出版事業局の『旅』に同年の2月号から連載された。結核の養生をする妻は、結末部分において事件の発案者であることも匂わされている。家の中で、愛読書である時刻表の中を旅する彼女の姿は、この雑誌『旅』の読者の姿そのものである。時刻表眺めるとか、路線図眺めるという快感・満足感は決して特殊なものではない。

実在の人物でも確認しておく。和歌森太郎の年譜をみると、小学生の頃は病弱で、学校を休みがちだったことがわかる。一年生、「四月、下目黒小学校に入学。以来毎月、半ば近く臥床、登校せぬこと多し」。五年生になる直前、「三月、帰京。下目黒小学校に戻る。健康よろしからず。臥床中、小説書と、国史書、相撲雑誌に親しむ」。この間、四年生の時期は静岡県浜松市で過ごした。

【和歌森太郎「創造的な旅を」(和歌森太郎著作集 第14巻) / 昭57／弘文堂) より】

小学四年のとき、父が浜松に転任になつた。特急列車といふものに乗つたのは、その移転のときが最初だつたと思う。

以来、特急に妙なあこがれをいだくようになり、浜松駅にそれが停まる時刻には、学校に差支えないかぎり、必ず駅に行き、改札の柵にまたがつて、特急を送迎しながら、ため息をついたものだつた。

【旅行案内】と称する、今の『時刻表』に相当するもの

を飽かずひろげては、各線の駅をそらんじ、駅相互間の時距離をおぼえたのも、そのころだつた。

時刻表は時刻の数字が空間的な距離を可視的に確認させる。距離が時間として、脚力には無関係に誰にでも等しく提示される。それは、結核を患つた女性や学校を休みがちな病弱な小学生をも例外とはしない。360度に地続きの空間に与えられた駅の順という目次は、書物の頁をすすめる身ぶりと親しみ易いから、これが案内記や旅行記を可能にする原動力なのだろうし、土を踏んだことのない地域を理解する際に不可欠な動脈となるのだろう。

鉄道に慣れ親しんでいる場合、空間的理解の中心に当たり前のように鉄道の路線を用いている。そして、路線図によつて世界を掌握しようとする視野と、伝説が刺激する「訪ねる」という身ぶりとが共鳴するところに案内記を読む楽しみが紡がれていたはずである。鉄道による旅の「運ばれる」という受動性は、容易に旅に出られない者にこそ、旅の可能性を感じさせる。

全国に等しい時刻をもたらしたのは鉄道である。時刻表に一面に並べられた数字には、必ず「今」が含まれているといつてもよい。毎日反復される列車の運行の中に「今、旅立てば……」という旅行が、そこそこに用意されている。比べてみれば歴史の年表には「今」が見つけられない。「今から何年前」を記入した手作り年表の有効期限が一年間のみだ、という寂しさを、歴史に詳しいと近所で紹介された人の家で感じたことが何度かある。

同時に、現在する身体を鉄道はどこかと結んでゆく。憧れの都

会、懐かしい故郷、特に上野駅に凝縮して語られがちな物言いを、遙かにのびてゆく二本のレールが生産する。浜松駅で特急列車を見送る太郎少年も、あるいはその行き先に下目黒小学校の友人たちは見たのかもしれない。だから、鉄道の締結は私たちに南北朝鮮の話題をわかり易く、情緒的に単純化して語りかけてくる。



最後に、町を歩く人々の身体に、伝説の記述が冊子状のパンフレットという「物質」として接触を持ったことを確認しておきたい。『lounge』は千葉銀行の自動支払い機の周辺に置かれ、『京成らいん』は駅の改札口周辺に置かれている。何となく手にされて帰りの車内の暇つぶしに目を通される。持ち帰られても部屋の隅に堆積してゆき、やがては資源回収に出される。口から耳への伝承というと、それは「情報」であるかのような印象を抱きがちだ。もちろんパソコンとかインターネットの網の目にそのまま移植される部分もあるのだろう。しかし、伝説は、紙の手ざわりや、それを手にする身ぶりとともに、地域に寄り添う。例えば、言い伝えを聞かせて欲しいという調査者に、書き留めたノートとして提示される。あるいは、持ち帰られたパンフレットが、大掃除の際に発見されて忙しいはずの手を止めさせ、つかの間、想像力によつて訪ね歩かせる。そんな身体性と伝説はともにある。

すると、伝説の周辺に見え隠れするところの、あの辺に何かあるのは知っているが実はよく知らないという意外な不真面目さと、立ち止まることを許されない窓の外を眺めている、通勤電車

注

- (1) 拙稿「史実と伝説とのなだらかな地続きーたしかめる・つくる・ただすー」(『世間話研究』第13号／平15)。
- (2) 拙稿「鉄道、あるいは旧道ー地域の物語と身体の移動とー」(『口承文芸研究』第23号／平12)。
- (3) 斎藤純「伝説集の出版状況についてー近現代の伝説の位置づけのためにー」(『世間話研究』第5号／平6)。
- (4) 本稿で引用していないものでも、松川二郎「趣味の旅 不思議をたづねて」(『趣味の旅 武藏野をたづねて』(いづれも昭3)などは、『口承文芸研究』をするうえで無視できない。
- (5) 拙稿「書窓車窓ー旅行・通勤の『声』ー」(『世間話研究』第12号／平14)。
- (6) 『朝日新聞』では「38度線物語 朝鮮半島分断半世紀⑤幻の鉄道」(平11年8月28日)、「コリア首脳会談1年⑨途切れたライン」(平13年6月8日)といった特集記事を組んでいる。
- (7) 平成14年度に當団地下鉄の改札口周辺に配された冊子類の中には、『口承文芸研究』の名を複数見つけることができた。(のむら・のりひこ／和洋国府台女子高等学校非常勤講師)